

けいせいこいびきやく

傾城恋飛脚

〔解説〕安永二年（一七七三）豊竹比吉座初演。近松門左衛門の「冥途の飛脚」を菅專助・若竹笛躬らが改作。梅川忠兵衛の哀れと、その父孫右衛門の情愛がしんみりと描かれた下の巻「新口村」が現在でもたびたび上演され、近松原作の「封印切」の後にこの段が上演される事もあります。歌舞伎の「恋飛脚大和往来」にも取り入れられ、浄瑠璃でもこの外題が使用される事もあります。

〔あらすじ〕飛御座亀屋の養子忠兵衛が恋仲の遊女梅川の身請の手付金として、恋敵の八右衛門の為替金を流用したことから、忠兵衛の許婚“おすは”は我が身を犠牲にして金を盗み出そうとしたり、梅川の父と兄は芝居を打ってまで金を作ろうと画策します。一方、亀屋の分家和平は八右衛門と組み、忠兵衛に罪を着せ更に毒殺しようとして企てますが、逆に自分の罪がばれてしまいます。八右衛門は梅川の身請金を持って来ますが、梅川と忠兵衛の事情を聞いている親方は受け取ろうとしません。忠兵衛はたまりかねて持ち合わせていた三百両の封を切り梅川を身請します。喜ぶ梅川に、実はその金は公金であった事を打明け、覚悟を決めた二人は大和へと落ちて行きます。

「新口村の段」忠兵衛の故郷新口付に着いた二人は、道場帰りの人の中に親孫右衛門を見つけますが、世の義理から出ていくことができません。梅川は雪道で転んだ孫右衛門を介抱し、それとなく名乗ります。養子親への義理を立て、目隠しをして忠兵衛に会った孫右衛門は二人に金を与えて逃してやるのでした。

新口村の段

涙にむせびゐる。

孫右衛門は老足の、休み／＼門を過ぎ、野口の溝の薄氷、滑るをとまる高足駄。鼻緒は切れて横さまに、どふと転べば『南無三』と、忠兵衛もがけど出られぬ身、梅川慌て走り出で、抱き起しつ裾紋り、

「申し／＼、どこも痛みは致しませぬかへ。お年寄の危ないこと、オ、マ危ないこと。お足も洗ひ、鼻緒も上げて上げませふ。マア／＼こちへ」

と手を引いて、うちへ伴ひ上り口、腰膝撫でて労はれば、孫右衛門は気の毒さ

「ア、戴きます／＼。どなたか知らぬが忝ない。お蔭で怪我も致しませなんだ。ア、若い女中のおやさしい。年寄りと思し召して、嫁子もならぬ御介抱、もふ／＼

手を洗はしやつて下さりませ、ハテマア手を洗はしやつて下さりませ。辛ひ庭に藁は沢山、鼻緒はわしがすげます」

と懐搜して取り出す塵紙。

「ア、申し、こゝによい紙がござんす。こより捻つてあげましよ」

と延紙引き裂くその手元、不思議そふに打守り

「こゝら辺りに見馴れぬ女中。マアこなさんはどなたなれば、このやうに懇ろにして下さります」

と、顔つれづれと眺むれば、梅川いとゞ胸つぼらしく、

「ハイわたしは、旅の者。わたしが舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好も生写し。他の人にする奉公とは、

さら／＼もつて存じませぬ。お年寄つた舅御の、臥し悩みの抱きかゝへ、孝行は嫁の役。御用に立つて嬉しいもの。さぞ連合ひは飛び立つ、サア飛び立つやうに

ござりましたよ。その紙とこの紙と替へてわたしが申し
請け、連合ひの肌に付けさせて、父御に似た親父様の
形見にさせたふござんす」

と塵紙袖に押包む、涙にそれとは知られけり。詞の瑞
に孫右衛門、『さてはそふか』と恩愛の、尽きぬ涙を
押し隠し、

「フウこなたの舅にこの親父が似たといふての孝行
か。エ、嬉しうござる。ガ腹が立ちますはい。わしも
年たけた悴めを、様子あつて久離切り、大坂へ養子に
やつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盗んだと
やら、あげくに所を走つた噂。この大和は生国なれば、
十七軒の飛脚屋仲間、お上からも隠し目付、あるひは
巡礼古手買ひ、節季候にまで身をやつし、この在所は
モウ／＼詮議最中。誰ゆゑなれば、その傾城の嫁御ゆ
ゑ。近頃愚痴なことなれど、世のたとへにも言ふとほ

り、盗みする子は憎ふなふて、縄かける人が恨めしい
とはこのこと。久離切つた親子なれば、良からふが悪
からふが、構はぬこととは思へども、大坂へ養子に行
て、利発で器用で身をもつて、身代もよふ仕上げた、
あのやうな子を勘当した親は大きなたはけ者と、指差
しられ笑はれたら、その嬉しさはどふあらふ。今にも
つい捜し出され、縄かゝつて引かるゝ時、孫右衛門は
目水晶。よふ勘当したでかしたと、誉められるのがお
りや悲しい、誉められるのが悲しうござるはい。ア、
それを思へば一日も早ふ往生お救ひと、拝み願ふは今
参る如来様御開山。コレ、マ仏に嘘がつかれふか」
と、どふどひれ伏し悶え泣き。梅川も声を上げ、忠兵
衛は障子より、手先を出し伏拝み、身をもみ歎くぞ道
理なる。なほも涙を押し拭ひ、

「様子聞いたか聞かぬか知らぬが、子を釣り出そふと

お上の計らひ。養ひ親の妙閑殿。一昨日牢へ入れられたげな」

「エ、」

「サ、それでつくづく思ふには、実の親を頼りにして、もしも忍んで来はせまいか、来たらばなんぼう不便でも、養子親への義理あれば、匿ふことはさて置いて、親が縄かけ出さねばならぬ。ア、どふぞ来てくれねばよいが。こゝら辺りを舞ひ舞ひ〜舞ひ付きはせまいかと、四年このかた逢ひもせず懐しい子の顔を、見ぬやうに、見ぬやうにと、雑行ながら神たゝきも、不便さからでござるはい不便さからでござるはいの。ア、とは云ふものゝ、若死するも人の一生。義理ある親を牢へ入れ、おめ〜と逃げ隠れは、末世末代不孝の悪名。所詮逃れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早ふ牢から出すのが孝行。サ、〜、〜、覚悟極めて名乗

つて出い〜ア、今じやない〜。今の事ではないはいやい。シタガそれもどろぞ親の目にかゝらぬところで、縄かゝつてくれヨ。現在血を分けた子に、早ふ死ねと教へるも、浮世の義理か是非もなや。なぜ前方に内証で、かう〜した傾城にかうした訳で金が要ると、便宜でもしをつたら、久離切つても親子じやもの。隠居の田地を売り立てゝも首縄はかけまいに。みなあいつが心から、その身も狭い苦をしをつて、いとしばなげに嫁御にまで、思ひもよらぬ憂目を見せ、知音近附き親にまで、隠れるやうに身を持ちなし、ろくな死もせぬやうにこの親は産付けぬ。エ、憎いやつじや憎いやつじや〜と思へども、可愛ふござる」

と泣き沈み分けたる、血筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾着より、金一包取り出し、

「これは京の御本寺様へ、上げふと思ふた金なれど、

嫁と思ふてやるではない。たゞいまのお礼のため。これを路銀にちつとなど、遠い所へ行て下され」

と、渡せば、梅川押しいたゞき

「お心づいたこのお金、逆様ながら戴きます。大坂を立ち退いても、わたしが姿目に立てば、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十両使ひ果して二歩残る。金ゆゑ大事の忠兵衛様、科人にしたもわたしから、さぞ憎からふお腹も立たふが、因果つくつと諦めて、お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢ふて進せて下さんせ」

と、奥の障子を開るを引止め、

「ア、コレやくたくない／＼。たつた今も云ふとほり、たとへ詞は交さいでも、顔見合はしたりや縄かけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立

たぬ。なんぼ義理が立てたいとて、親の手づからどふ縄がかけれふぞ、どふ縄がかけれふぞいの」

「御尤もでござります。そんなら顔を見ぬように」

と、傍にあり合ふ手拭取り、泣く／＼後に立廻り、

「慮外ながら」

と、めんない千鳥

「御不自由にはあらうが、かうさへすれば、傍にござつても構ひはあるまい」

「オ、忝なうござる。もの云はずと顔見ずと、手先へなど触つたら、それが本望逢ふた心。親子一世の暇乞ひ。ガコレ必ずこなたの連合ひに、もの云はして下さるな」

と悦ぶうちに忠兵衛は、嬉しさあまり駆出でて、親子手に手を取交ぜど、互に親ともわが子とも、云はず云はれぬ世の義理は、涙湧出る水上と、身も浮くばかり

に泣きかこつ。折から聞こゆる多くの人音、二人を奥へと突きやりく

「コレく女中。アノ物音は確かに捕手。この裏道の小川を渡り、藪を抜ければ御所街道。サ、早ふく」と気をもむ所へ、巡礼姿の八右衛門、利平も共に蚤取り眼。役人大勢打連れだち、

「この内が気塞いな」
とどかくくと込み入るところへ、組子一人駈け来り、

「ところは長谷の山続きに、梅川忠兵衛と名乗る者。休みおつたを追つ取り巻き、からめ捕らんと致せども、仲々手に合ひ申さず」

と、聞くより小頭、

「さてこそく、来たれ続け」

と引返せば、二人も共に飛んで行く。孫右衛門は飛立

つ嬉しさ、

「天の助けか忝ない」

と、裏道見やつて伸上がり、

「オ、そふじゃくその道じや。ソレその藪をくぐるなら、切株で足突くな」

と届かぬ声も子を思ふ、平沙の善知鳥血の涙、長き親子の別れには、やすかたならで安き気も、涙々の浮世なり。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。